

50495

教科書文庫

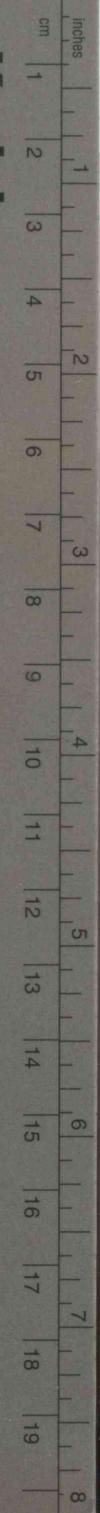
5
810
34-1948
01304
49589

# Kodak Gray Scale

C Y M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



## Kodak Color Control Patches

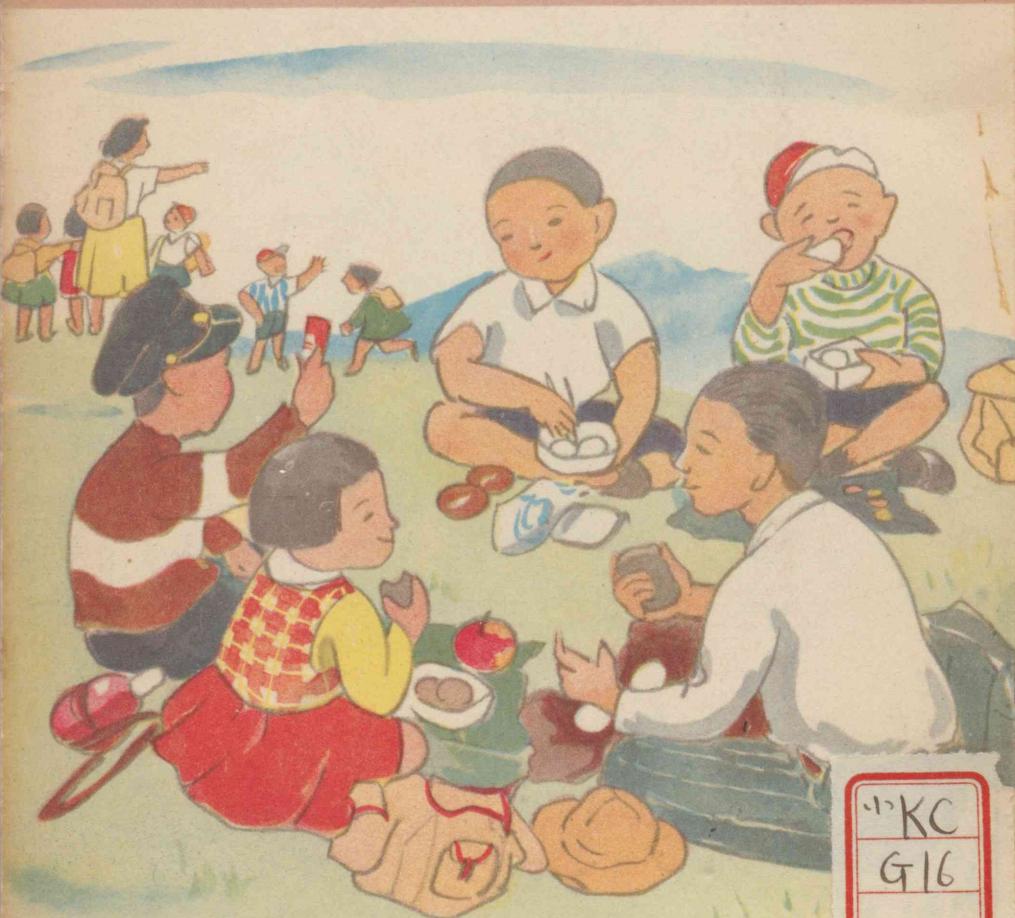
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



二年生の  
へ

一



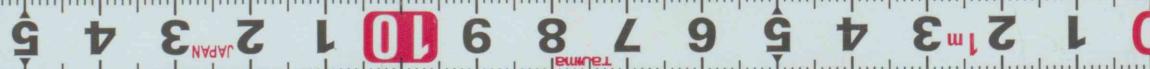
学校図書株式会社発行

KC  
G16

34  
013

小国 204
学 国
一

書科検定済修編研究会図書教育人財法  
教育出版社資料室



中央図書館

寄 贈

教科書文庫

5

810

34-1948

0130449589

昭和二十三年八月二十日文部省検定済

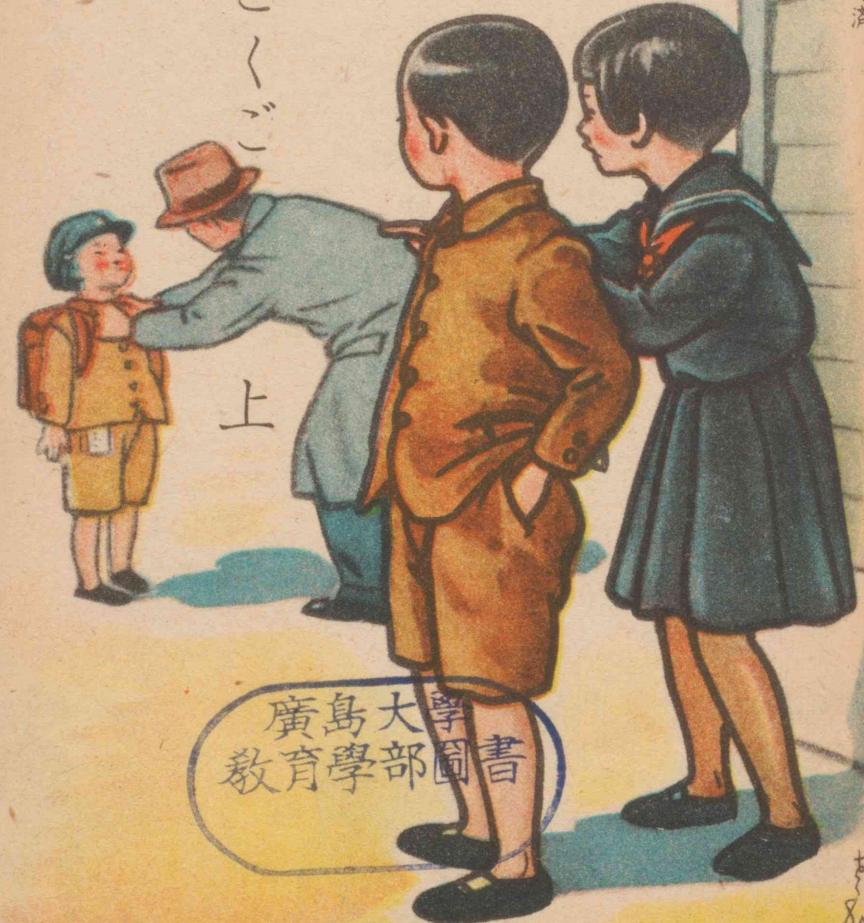
広島大学図書

0130449589



二年生のこくご

上



学校図書株式会社

広島大学図書

0130449589



もくろく

一 二年生

二 たんじょう日

三 五月の川の中二十二

四 えんそく

二十八

五 かめとうきぎ

四十一

六 ほたる

六十八

七 なまえ

七十一

八 かぼちや

七十六

九 夏やすみ

八十二

十 五十音

九十二



## 一二年生

一

みのるぼくは二年生。

ふみ子わたしも二年生。

みんなきょうから二年生。

まさお学校のやねがみえる  
よ。

しんじおやじんちようげの

におい。

としそおはよう。

みんなおはよう。

ゆたか一年生がとおるよ。

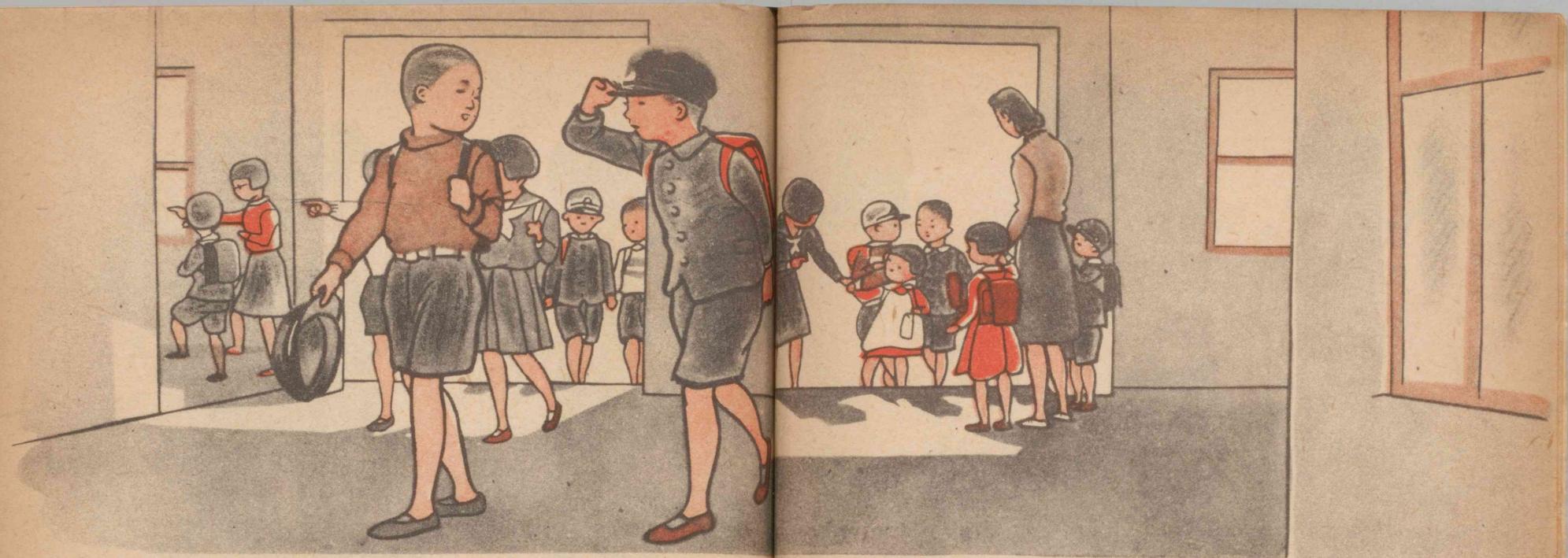
男みんな

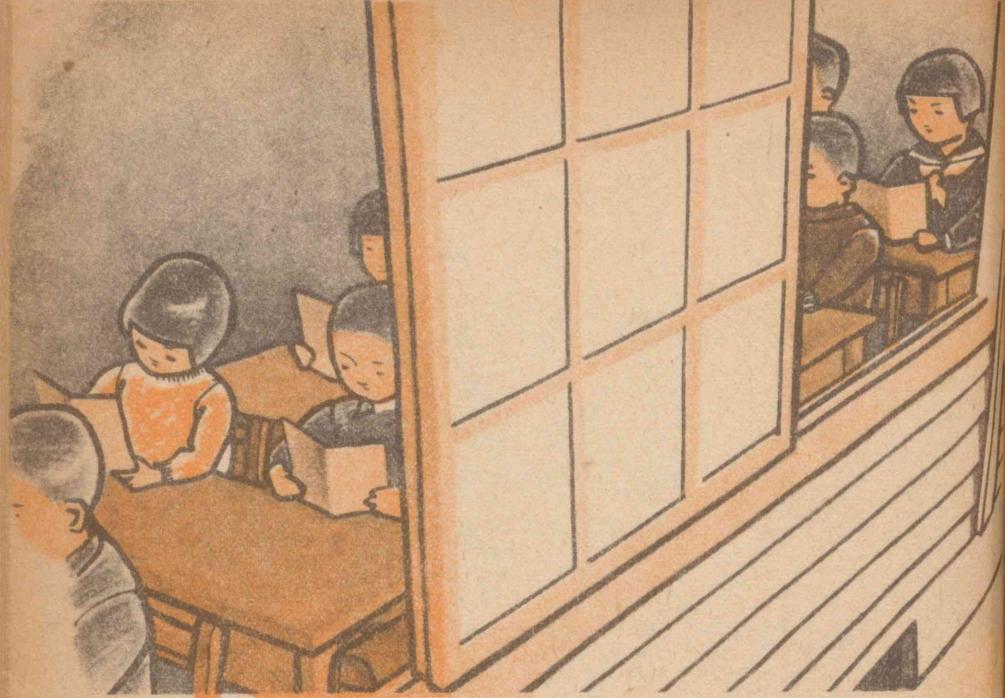
ばくたちは二年生。

女みんな

わたしたちは二年生。

ちよ学校のもんがみえる





男みんな  
 ちよ  
 きれいな  
 本が  
 たくさ  
 みのる  
 み子  
 あたらし  
 い本。  
 みの  
 ふみ子  
 あたらし  
 い本。  
 まさお  
 こくご。  
 どしこ  
 さんすう。  
 しんじ  
 おんがく。  
 しゃかい。

ニ

ファ・ソ。

れ  
 よ  
 みの  
 よし  
 みの  
 よ  
 り  
 みん  
 たみ  
 み子  
 みんな  
 かけ  
 あし  
 すす  
 むラン  
 ドセル  
 が  
 おも  
 いよ。  
 いる。  
 つば  
 めも  
 おは  
 よう。  
 かえ  
 つて  
 きた。  
 あら、  
 ひば  
 りが  
 な  
 い  
 よ。



女みんな  
みんな みんな べん

んあるよ。  
みんな みんな べん  
きょうするのよ。

みんな みんな べん  
きょうするのよ。

たみ子 まどを あけましょ。

すすむ あたたかい 風。

よし子 春の お日さま。

ふみ子 先生も にこにこ。

みのる ばくたちも にこにこ。

とし子 わたしたちも にこにこ。

みんな みんな みんな うれし

い きょうしつ。

しんじ 大きなこえで よもうよ。

ち ょ 大きなこえで うたいま  
しよう。

ゆたかぼくは 二年生。

れい子わたしは 二年生。



みんな みんな きょうから 二  
年生。

三

すすむ アメリカにも 二年生が  
いるよ。  
たみ子 フランスにも 二年生が  
いるよ。

みのる どこの くににも あた

らしい 二年生が いるよ。

まさお しつかり べんきょうしよう。

とし子 いい子の 二年生に なりましよう。

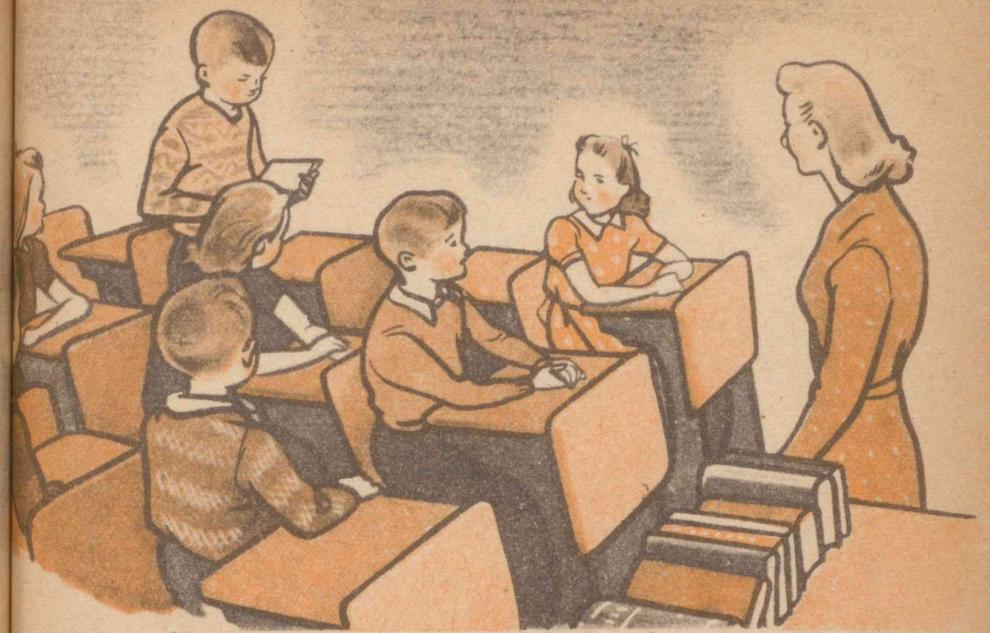
しんじかねが なるよ。

ちよ すずめが きょうしつを みているよ。

男みんな ぼくたちは 二年生。

女みんな わたしたちは 二年生。

みんな きょうから うれしい 二年生。



二 たんじょう日

一

きょう 学校で、みんなの  
たんじょう日しらべをしました。  
山田くんと 中島さんが、  
こくばんに、だれが、どの  
月に 生れて いるかを 書  
きました。

一月 二月 三月 四月



六月

七月 八月 九月



四月と 一月に 生れた  
人が、いちばん多くて、十月、  
三月、十二月が、一人ずつで  
した。

十一月生れは 一人も あ  
りませんでしたが、

「先生は、十一月生れですか  
ら そこに なかまいりさ  
せて もらいましょう。」  
と おっしゃつたので、みん

な「わあっ」とよろこびました。

これで、どの月にもだれかのたんじょう日があるわけです。

五十音じゅんで、いちばんはじめの秋山くんは、三月二十八日生れでぼくらの組のいちばんの弟です。四月五日生れの山本さんはいちばんのねえさんです。

「みなさんのがんじょう日には、お

うちでどんなことをしていただきますか。」

「おいしいごちそうをつくって、おいわいしてくれます。」

「せきはんをたいてくださいます。」

「なかのいい友だちをよんできごちそうをしたり、あそんだり

します。」

「しゃしんをうつします。」

「おいわいに、本やがくようひん

などを かつて いただきます。この ふでばこは、きよ年の たんじょう日に、おばさんから いただいたのです。

「私の たんじょう日の ころは、ちょうど 田うえがいそがしいので、つひ、おうちの 人にも わすれられます。」

「それは きのどく ですね。」

「まだ、いろいろ あるでしょ ね。たんじょう日は、みなさんが もっと もっと 元気で、いい 子になれる ように おいわいするのです。」

ことしは、わたしたちの 組でも、おうちとは ちがつた しかたで、たのしい たんじょうかいを、学校で したいと 思います。みなさん、その やりかたを、かんがえて いらっしゃい。あしたは、また その ことについて、いろいろ 話あいを しましよう。」

## 二

あしたは、ぼくたち 四月生れの 人の たんじょうかいです。ゆうべ うちの 人から、ぼくの 小さい どきのこと 話して もらいました。

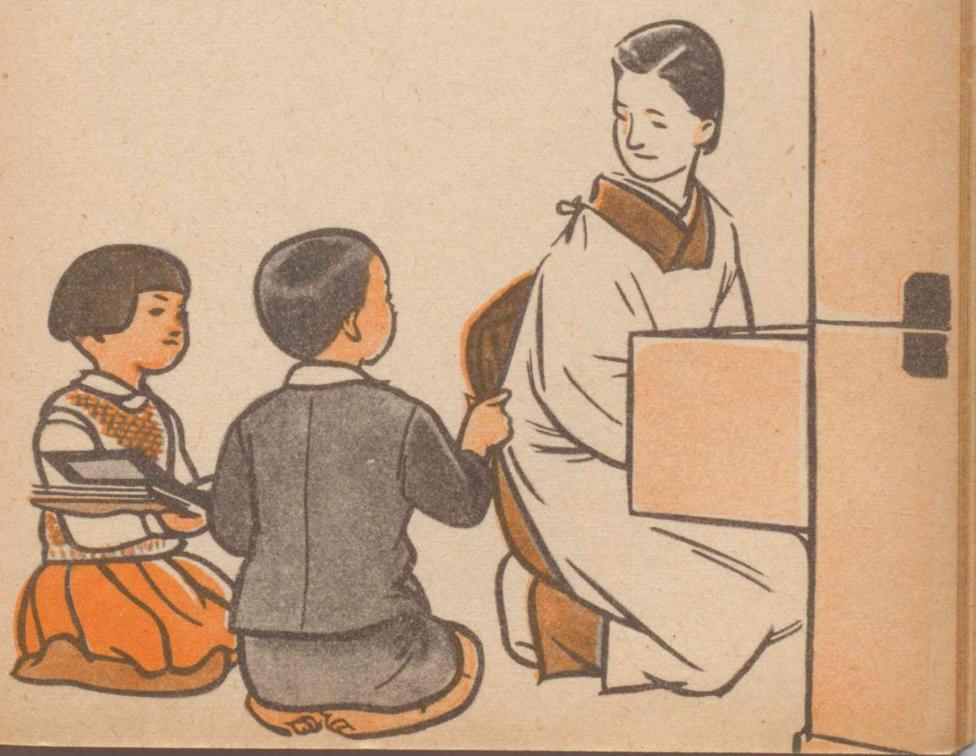
よく びょう氣を して、  
みんなに しんぱいを かけ  
たり、なきむして、とくべつ  
せわを やかせたり した  
話を、きいて いて、はづか  
しく思いました。

また しゃしんちょうや、  
小さい ときからの えや、  
らく書ちよう なども 出し  
て いたきました。

「ぼくにも、こんな かわいい ときが  
あつたのかなあ。  
「どんな きもちで、こんな えを かいだのだろう。」  
と、ひとりでに おかしく なりました。

おかげさんは、しゃしんを みながら、ぼくの 小さい  
ときの ことを、いろいろ おはなしして くださいまし  
た。

「これは、みのるさんが 五つの ときでした。ちょうど  
おばさんが きて いらっしゃってね、おもしろいこと  
が ありましたよ。



みのるさん、おにわにはたけができたのね。

あら、なにかはえて  
いますよ。みのるさん、

まいたの。

みのる 「うん、まいたよ。」

みのる 「なにまいたの。おし  
えてちようだいよ。」

みのる 「ちがうよ。」

みのる 「ちがうよ。」



おばさん 「じやあ なあに。こまつな。」

みのる 「ちがうよ。たき火のはいを まいたんだよ。」

おばさん 「まあ、いじわるな みのるさん。」

このときは、おばさんも おかあさんも 大わらいを  
しましたよ。」

あしたは、しゃしんを 学校へ もつて いって、その  
話をしようと思つています。

三 五月の 川の中

つつじや かきつばたなど、いろいろの 花が、水の  
上に、うつくしい すがたを、うつして いました。

ひょうきんな みずすましは、あさ 早くから ダンス  
を はじめて います。

ぐるぐる まわって、ぐるぐる まわって、また ぐる  
ぐる ぐるぐる。

川の そこから、空を みて いた 黒い こいと 赤

い こいが、

「いい お天気だな。どれ、ぶらぶら あそびに でかけ  
て、ダンスでも けんぶつして こようか。」  
と いいながら、なまずの おじいさんの うちの まえ  
を、とおり かかりました。

「あ、もしもし、どこへ でかけるな。」

と、なまずの おじいさんは、声を かけましたから、  
「みずすましの ダンスでも みに いこうと 思うのだ。」  
と、こいたちは こたえました。

「いまごろ、ふらふら でかけるのは、よしたが  
いい。」

おじいさんが そういって  
いる 時 です。がやがや  
こどもの 足音が して、  
「やあ つかまえた。こつち  
へいれものを よこせよ。」  
といつて いるのが、きこ  
えました。

「みずすましさん ですよ。」

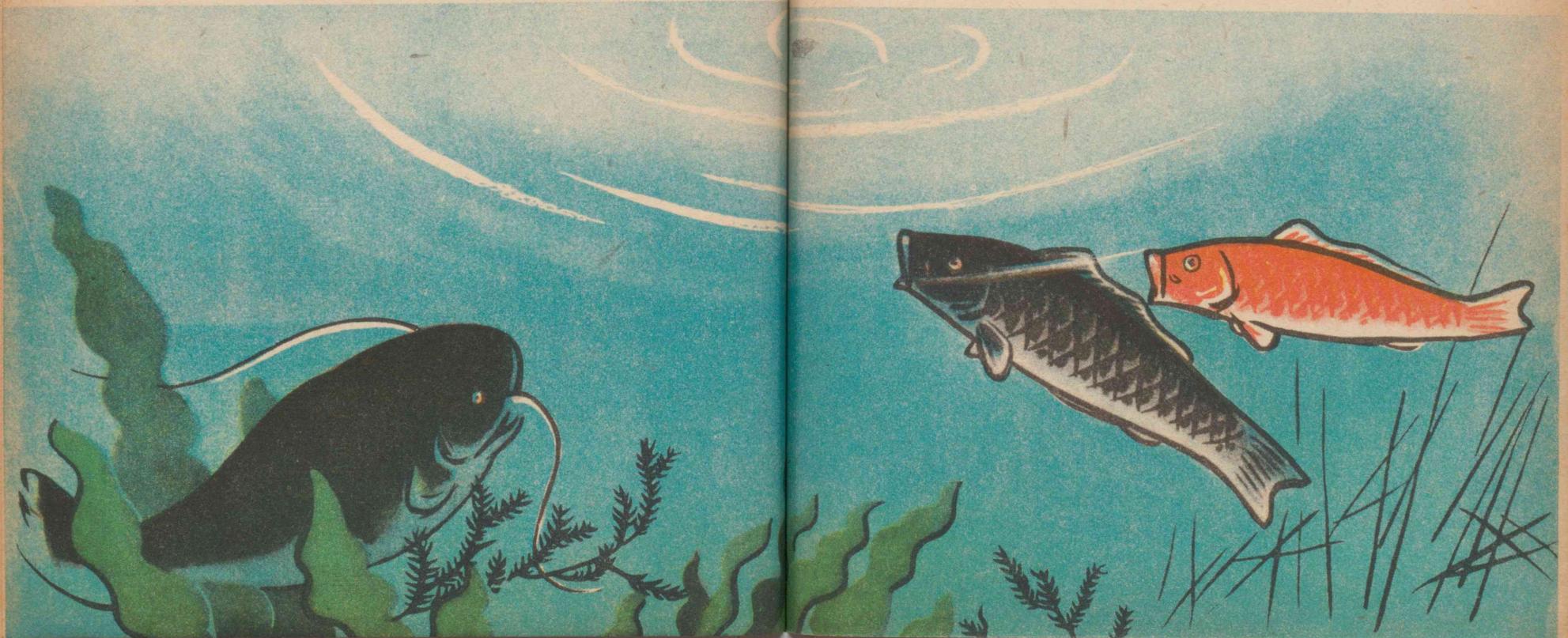
と 赤い こいが、きれい  
な きものの そでを ひら

ひらさせました。

「それ、いわない ことか。  
だが、りこうな みずすま  
しだから、ばんには にげ  
てくるだろう。」

と、なまづの おじいさんは  
わらいました。

まだ、日のくれない う  
ちに、みずすましは、川へ  
かえって きました。もう



あたりに 人かげもなく、あんしんなので、こいも、  
なまづも、みんなでてきて、みずすましをとりま  
で、話をききました。

「やあ、おもしろかった。おかげで、ちがつた世界を  
みてきた。おどろいたことには、大きなこいが、  
いくつも空をおよいでいたことだ。」

と いいました。

「いや、そんなはずはない。」

と、なまづのおじさんは、あたまをふりました。  
「うそではあります。じゃ、あした、あの大きな

こいに、ちょっとここまできてもらいます。」

と、みずすましはくやしがりました。

つぎのあさ、みずすましは、あちらの空をさして  
とんでいきました。しかし、どうしてこいのぼりの  
こいを、つれてくることができました。



四 えんそく

一

「おかあさん、ラジオの 天気よほうは、もう ありますか。」

「さあ、まだの ようですよ。きょう こんな いい お

天気ですもの 大じょぶですよ。」

「でも、ぼくらの えんそくだと いようと よく 雨になるもの。」

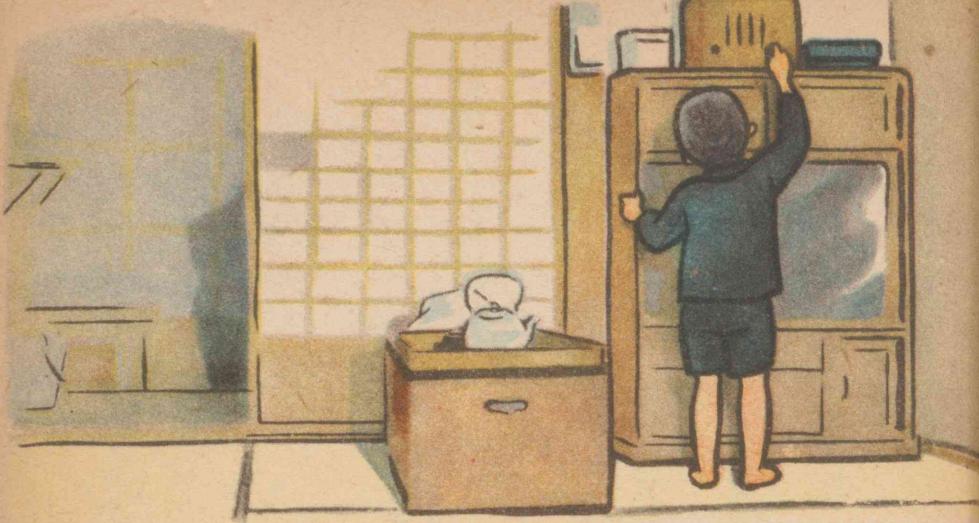
「しんぱいなら スイツチを いれて ごらん。もう、そ

ろそろ その じこくでしょう。」

『この お天気は、ここ 二三日  
つづく みこみです。わかばの  
山への ハイキングなどには  
とても いいでしょう。』

「おかあさん、あしたも  
天気だそうですよ。」

「よかつたわね。さあ、あさに  
な お



つて まごつかない ように しつかり よういして お  
きなさいよ。』

「はい、おいしい おべんとうと、それから おやつもね。』  
「いいですよ。あしたの あさ ちゃんと リックに  
れて おいて あげますからね。』

ラララン ラララン  
ラララララン

あしたは うれしい  
えんそくだ。

ぼくらの たのしい  
えんそくだ。  
ラララン ラララン  
ラララララン

「あ、そうだ。早く 用意して  
おこう。』

リックサック、すいとう、そ  
れから ハンカチに ちり紙、  
手ちょうど えんぴつ。それ



に、はきものはいいかな。

ようし、これで

みんなそろつたぞ。

おべんとうと、おやつは

あしたのあさのおた

のしみだ。」

二

ぴいちく ぴいちく  
なく ひばり、  
麦ぶえ ふいて

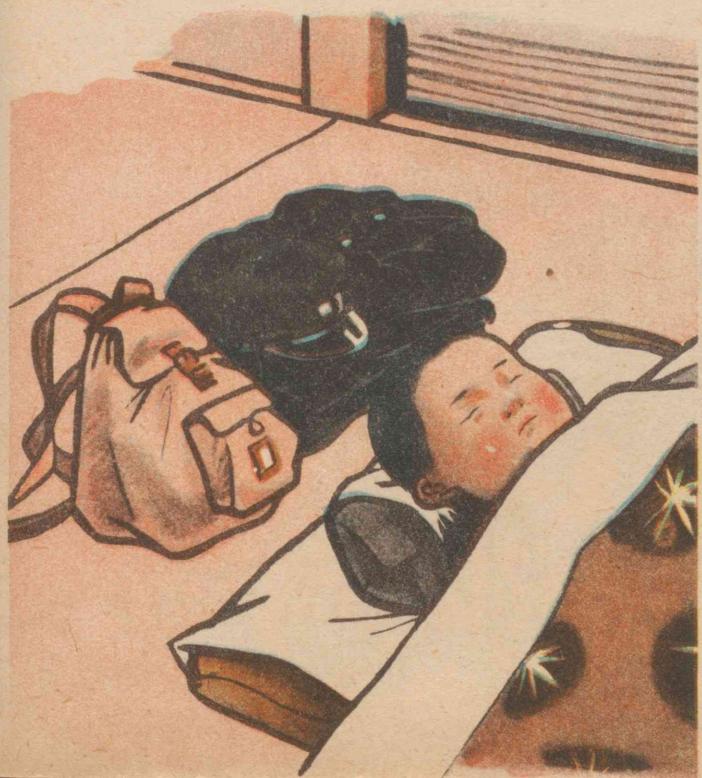
ひばりに きかそう。

あるけ あるけ

元氣に いこう、

ほ麦の そよぐ

みどりの のみち。・



ちりちり ちりり

すずが なる、

リックサックの

すずが なる。

あるけ あるけ

元気に いこう。

わかばの かおる  
林の こみち。

### 三

「先生、この 用水路の 水は どこから ながれて く  
るのでですか。」

「さつき わたつた あの 川を 川上で せきとめて  
ひいて きて いるのです。」

「先生 この 水は、村よりも ザつと 高いところを  
ながれて いますね。」

「そうです。いい ところに 気が つきました。この  
村の 家や たんぼは、みんな この 用水路より 下  
に ありますね。」



「なぜこんな高いところに水をひいているのですか。」

「さあ、なぜでしょう。それはみんなでかんがえてごらんなさい。」

「水が下のおうちへ、よくながれます。」

「どこのたんぼ

からです。」  
がらです。  
が い へ  
な よ き  
れ く お  
こ む 水



「上から、いきおいよく水がながれてきているど  
家々でつかつたきたない水も、それといつしょ  
に、どんどん下の川へながれこみます。」

「よく、かんがえましたね。どのかんがえもいいです  
よ。用水路が高いところをとおつていると、そ  
んなにいいことがあるのですね。」

「この用水路は、この村の人がほつたのですか。  
「そうです。むかし、この村は、大そう水に不自由  
したところで、たんばがなく、はたけばかりだつ  
たそうです。ところが、百年ほどまえ村じゅうの

人が力をあわせてこの用水路をほつたのですよ。」

「ずいぶんむかしにできたのですね。」

「そうです。この用水路のおかげで、この村は、この  
あたりでも一ばんお米のとれるところになりました。  
また、いまほの出ている麦をかりとつてしまふと、この用水路いつぱいに水をひきます。  
そして、あのひろいたんばにどんどんながしこんで、いっせいに田うえをしますよ。どんなひで  
りの夏でも、この村だけは、けつして水のしんぱいはないそうです。もうすこしむこうへい

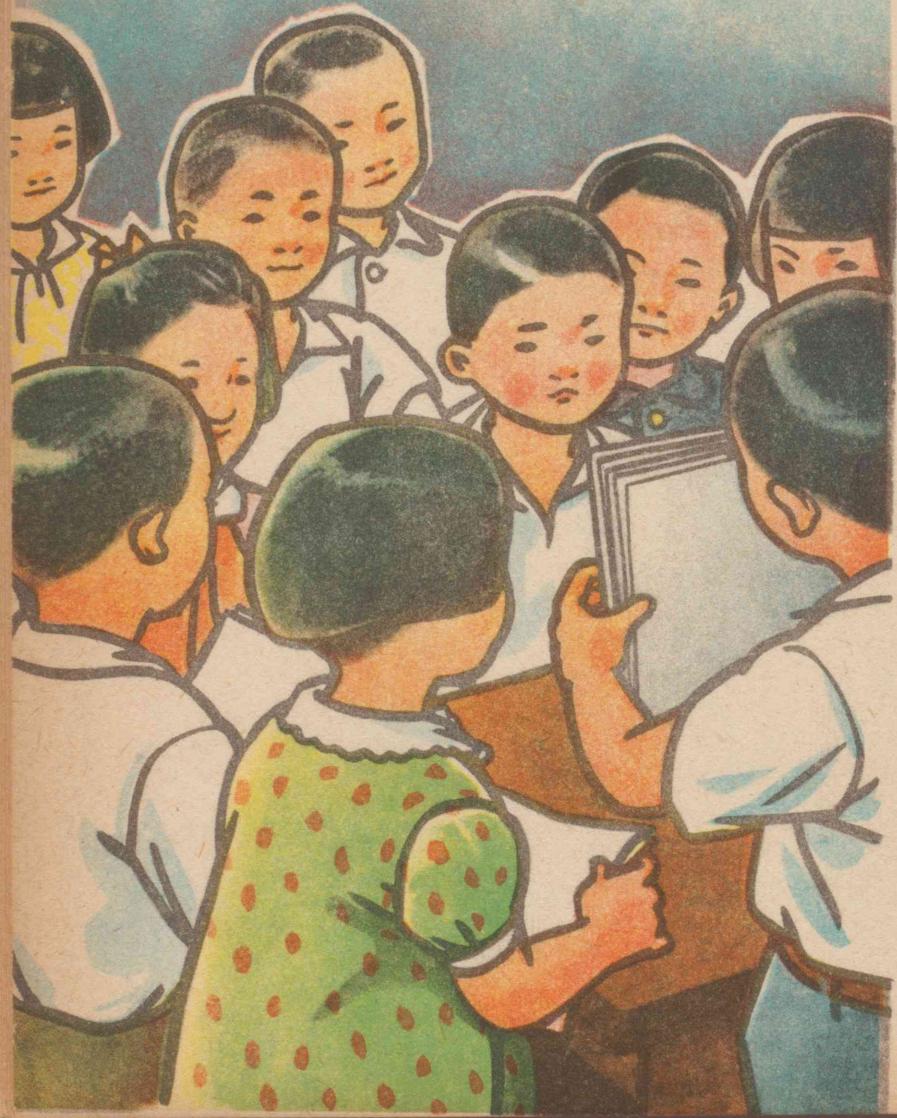
くと、この用水路の いわれを きざんだ きねんひが  
たてて ありますよ。」

「この用水路で 水およぎ できますね。」

「でも、用水路いっぱい 水が ながれて いる とき

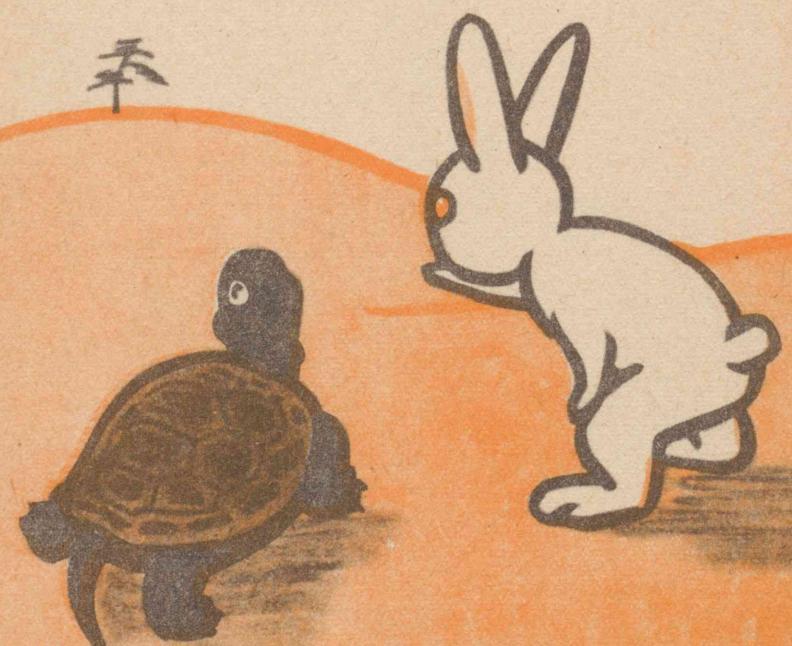
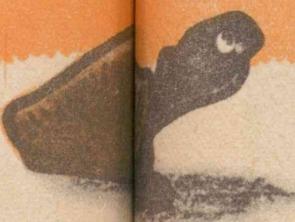
は ぼくらでは あぶないよ。」

「いい べんきょうを しましたね。さあ、もう そろそ  
ろ おべんとうに しましよう。」



これは、紙しばいです。話かたをくふう  
したり、自分ですきなえをかいたり  
して、おもしろくやつてみましょう。

もしもし かめよ  
かめさんよ。  
世界のうちで  
おまえほど、  
あゆみののろい  
ものはない。  
どうしてそんなに  
のろいのか。



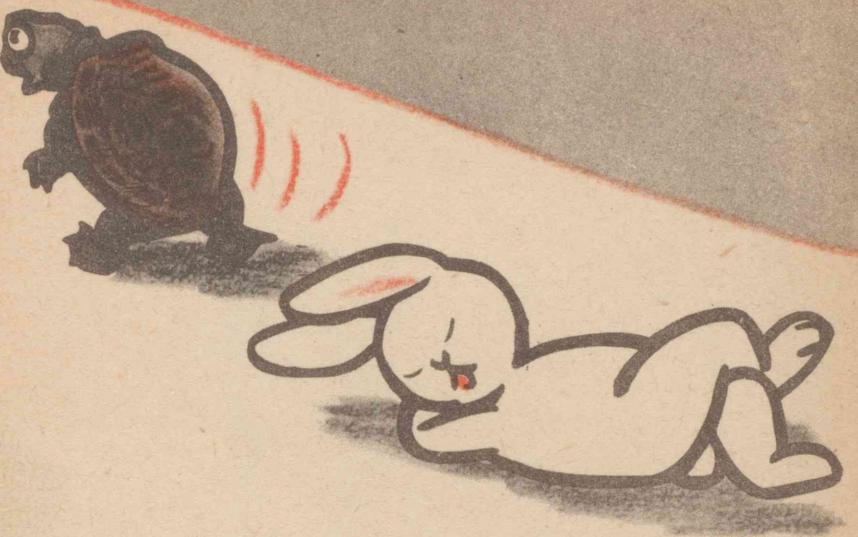
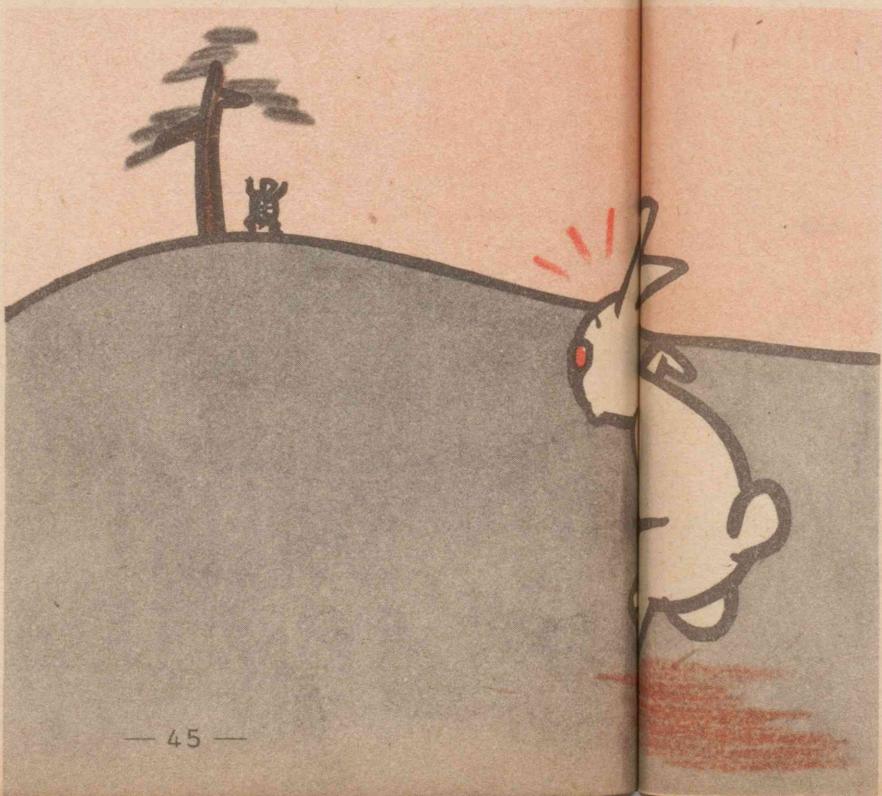
など おっしゃる  
うさぎさん。  
そんなら おまえと  
かけくらべ、  
むこうの こ山の  
ふもと まで、  
どちらが さきに  
かけつくが。

## 1

かけくらべに まけた うさぎさんは、すっかり  
しょげて、東の山にかえって いきました。  
かつた カめさんは、おおよろこびで、西の海べに

さつきの じまんは  
どうしたの。

これは ねすぎた  
しくじった。  
ぴょん ぴょん ぴょん ぴょん  
ぴょん ぴょん ぴょん。  
あんまり おそい  
うさぎさん。



どんなに かめが  
いそいでも、  
どうせ ばんまで。  
かかるだろう、  
ここらで ちよつと  
ひとねむり。  
ぐう ぐう ぐう ぐう  
ぐう ぐう ぐう。

いそぎました。お日さまは、海の

むこうに しづんで 夕やけの  
空が 赤く つづいて いました。

なみうちぎわで、かめさんは、ひ

とりの 友だちに あいました。

「どうしたの。うれしそうな  
おを して……」

と、その 友だちは いいました。

「うれしいとも……」

と、かめさんは にこにこして、

かつた 話を しました。

「でも、うさぎさんは、お山で いちばん早いのだろう。」

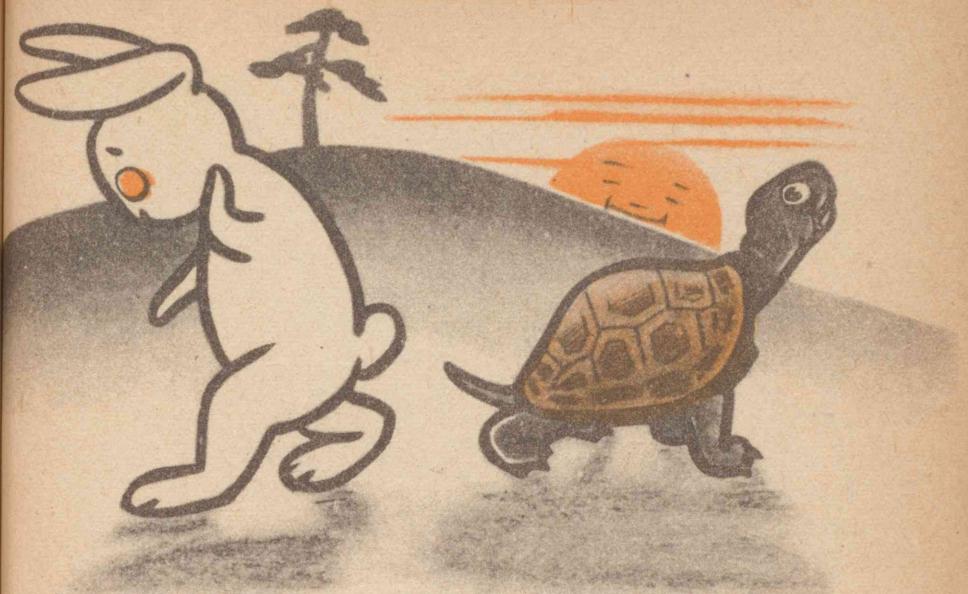
「いくら 早くても ぼくには かてなかつたのさ。」

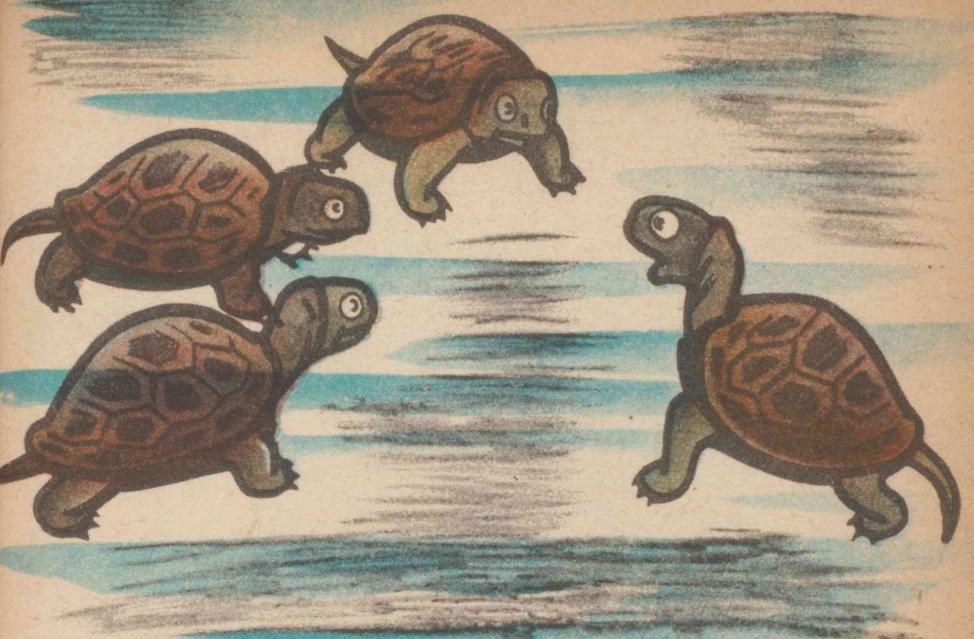
と、かめさんは ちょっと いばつて みせました。

2

この 話は、はまじゅうの かめの あいだに  
ひろまりました。かめさんは、たちまち はまべの  
人気ものになつてしまひました。

小さな 子がめたちは、かめさんの すがたを みると  
かけくらべの 話を、なんべんでも ききたがりました。





かめさんは、そのたびに、いきもちになつて、くりかえしましたが、のちには、うさぎがどちらでねむつてしまつたことを、わすれたようにいわなくなりました。

ある日、すな山でこうらをほして、いると、たくさんの中子がめがよつてきて、また話ををしてくれとたのみました。

かめさんは、いちだん高いところへあがつてまるでえんぜつでもするよう、声をはりあげ手をふつてはなしだしました。あまりむちゅうになつていたので、すな山のそばをとおりかかつた、おかあさんのすがたにも、気がつきませんでした。

その夜、かめさんがおうちにかえると、月の光でおかあさんが、まつていらっしゃいました。とおとうさんが、かめさんをみると、

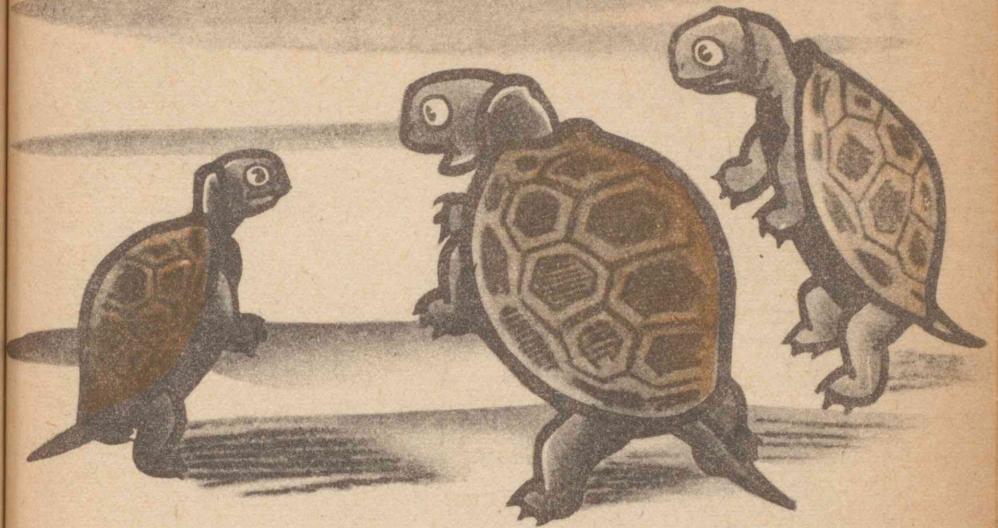
「おまえは 子がめたちに、じ  
まん話を して いたそだ  
ね。」

「じまん話では ありません。  
ほんとうの ことを その  
まま はなしたのです。」

「かめさんは おこつたよう  
な 声で いいました。」

「かめと いう ものは、うさ

ぎさん が いつた どおり、世界の うちで いちばん の  
ろい のかも しれない。そのかわり およぐ ことも  
できれば、海の、そこを あるく ことも できる。そ  
れが だれにも まねの できない かめの いい と  
ころだ。それを わすれて、足の 早い うさぎさんと  
かけくらべを したのは、はじめから まちがつて いる。  
おまえが かつたと いうのは、うさぎさんが どちら  
うで いねむりを したからだよ。これからは、もう  
うさぎさんに かつた 話は、しない ほうが いいね。」



おかあさんも、そのとおりと、いうかおをしていらっしゃいました。

4

そのあくるあさ、かめさんは、このまえのうきぎさんにあつたのはらへ、そつとでかけていきました。もういちど、かけくらべをしようと思つたのです。

ゆうべおとうさんからちゅういされたとき、かめさんは、へんじもしないでだまつていました。心の中では、あんなかけくらべなら、いつでもかてる

から、こんどは、おおぜいのまえで自分の力をみせて、おとうさんやおかあさんを、あつといわせようと思つていたのです。

のはらへつくと、うきぎさんが、ながい耳をふりたててはしつてきました。

「おはよう、かめさん。」

と、うきぎさんがあさのあいさつをしました。

そして、

「このまえのかけくらべは、すつかりしくじつたよ。」

と、あたまをかきました。

「では、もういちどしよう。」

と、かめさんがいいました。

うさぎさんは赤い目をくり

くりさせながら、

「ダメ、ダメ。きみとかけく

らべをしたといつたら、

おうちでしかられたよ。そ

のうえまたといつた

らなおしかられたんだから。」

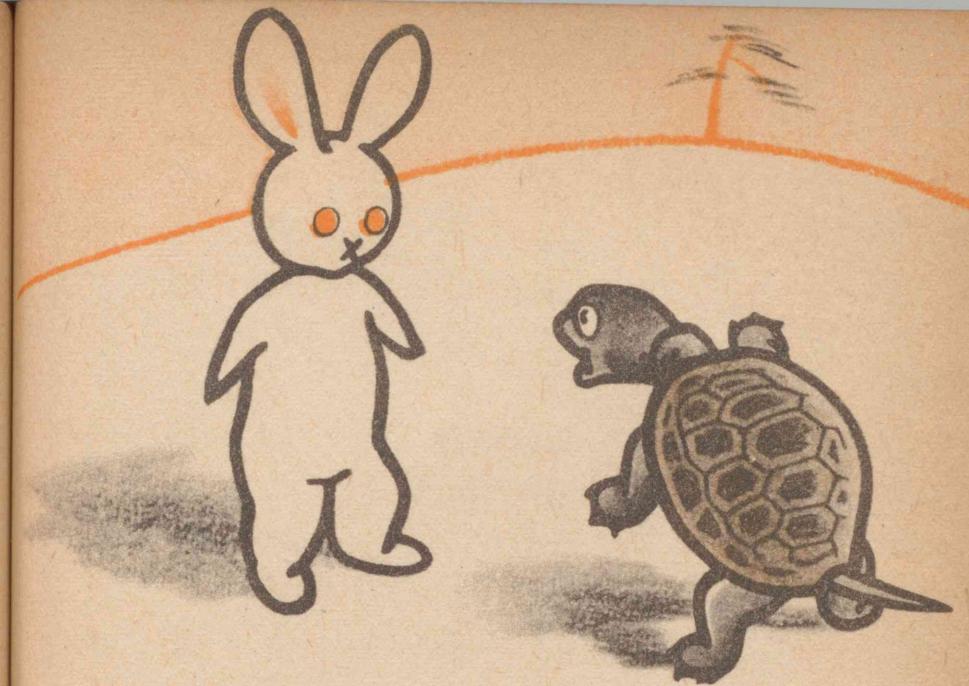
といつてわらいました。

「こんどしたら、きみはかてると思つかい。」

「そりやまけないよ。」

「よし、そんならまたしよう。」

うさぎさんは、いやだといいましたが、かめさんは、ぜひしようといました。しまいには、うさぎさんも、とうとうしようとうちして、かめさんのいうどおり、あすはまべにちかいのはらで、二かいめのかけくらべをすることになりました。



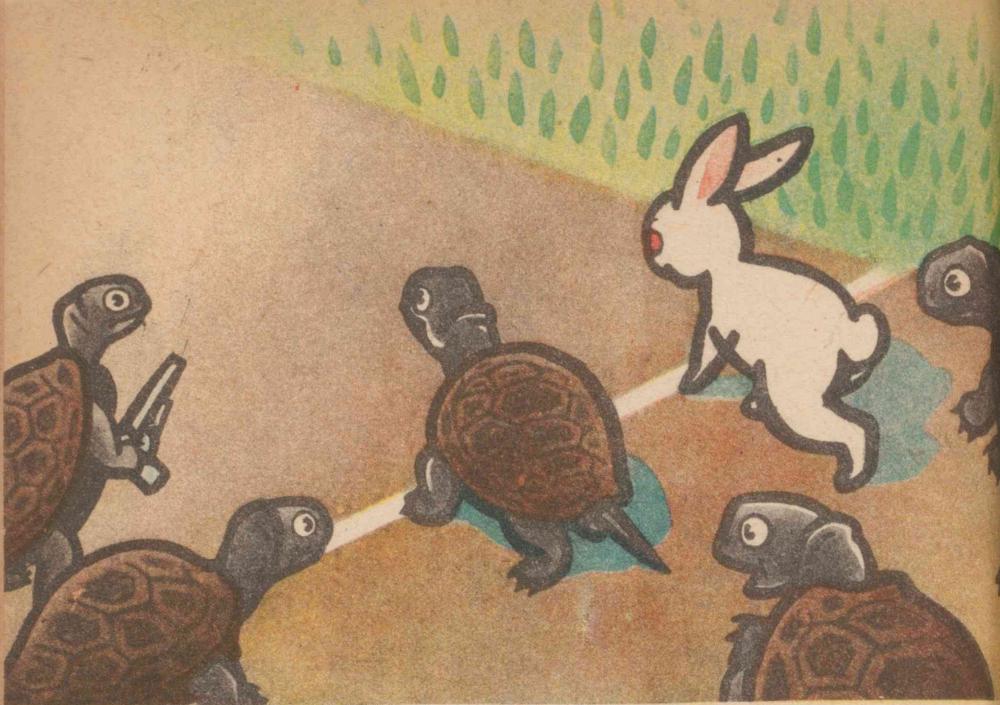
その日になると、かめさんは、おおぜいの友だちや子がめたちをつれて、やくそくのはらにきました。

うきぎさんは、たつたひとりで、ピヨンピヨンはしつてきました。あまりかめさんのなかまがおおいので、びっくりしたようでした。

「むこうのおかにある一本まつまではしることにしよう。」

と、かめさんがいいました。

「いいよ。」



かめさんの友だちがしんばんになりました。ふたりはしんばんが地めんにひいたせんの上にならんで、かけだすよういをしました。かめさんの友だちや子がめたちは、手をたたいたり、かめさんのなまえをよんだりしておうえんしました。「ようい。」

しんばんが 手を あげました。

「どん」

ふたりは、その 声を きくと、いつしょうけんめい、かけだしました。

6

うさぎさんは、かめさんが 二足 三足 いく  
あいだに、草を とびこえて、ぴょん ぴょん は  
しつて いきました。  
「しつかり、しつかり」。  
「もつと いそげ。」

かめさんは、おうえんの こ  
えを うしろに ききながら、  
いまに おいついて みせると、  
あんしんして いました。  
一本まつの どちらに、川  
が ながれて いる ことを、  
かめさんは しつて いました。  
きのう おとうさんの ことば  
も きかずに、うさぎさんと  
やくそく したのですが、うち

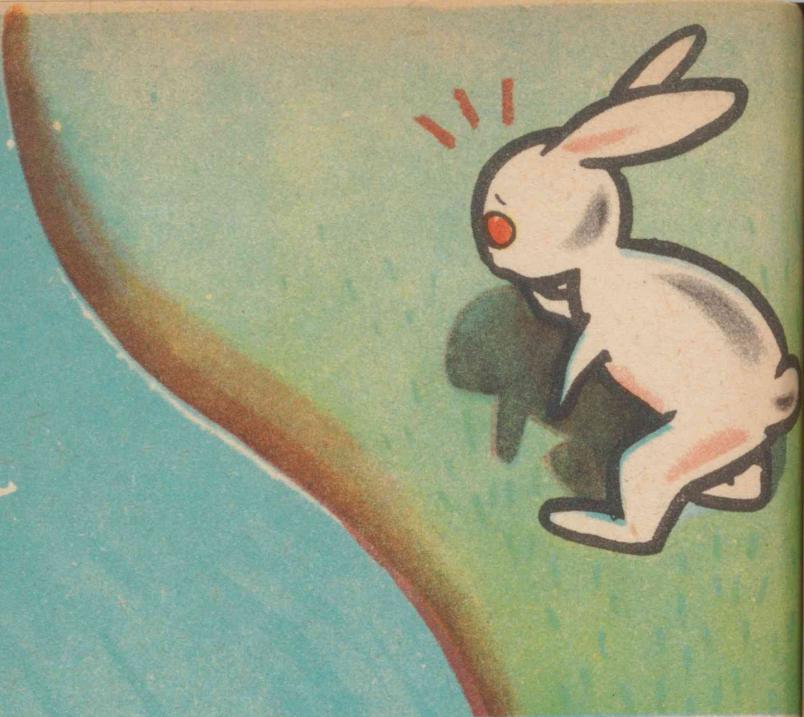


二ごめの  
かけくらべを

にかえると、だんだんしんぱいになつてきました。

そして、いろいろかんがえたのち、川のあるところを、かけくらべの道にえらんだのでした。そうすれば、うさぎさんはおよげないし、ずっととおまわりをしなければならないのです。まわり道をするあいだに、あのうさぎのことだから、つかれてひるねでもするにちがいないと思つたのです。

7



ぴょん、ぴょん、ぴょん……、うさぎさんは、一本まつをめあてに、いつしうけんめいにはしつていきました。こんどは、どんなことがあつても、さいごまではしりつづけたいと、心にきめていたのです。

はじめに、じぶんのせなかより高くしげつた草の中を、いきおいよくとおりすぎました。それから小高くなつたおかをひといきにこ

えました。一本まつはもう目のまえです。

ところが、こざきのやぶをくぐりぬけた時、うさぎさんは、きゅうにたちどまりました。川があるのです。

「さあ、こまつた。」

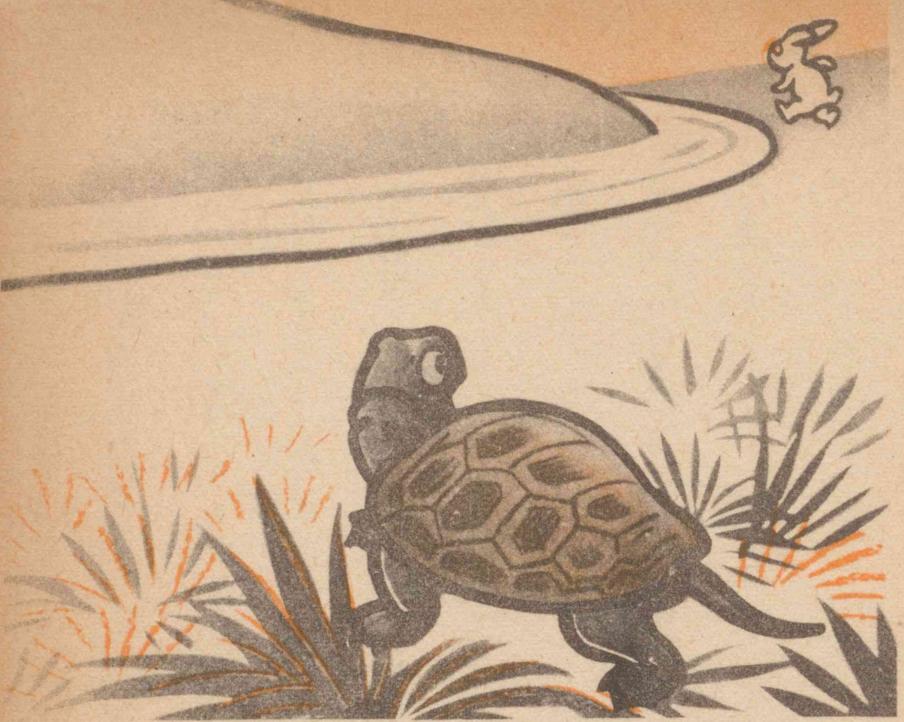
とびこすにははばがひろすぎるし、わたるにはふかすぎます。およぎのできないうさぎさんは、くやしそうに、ながれる水をみています。

おうえんにきたかめさんのなかまは、ふたりがかけだしたあとで、すぐそばにある

おかにのぼりました。すこしのぼると、そこから一本まつまで、ひと目にみることができるのです。

「おや、うさぎさんがへんなほうへはしっているよ。と、いちばんさきにのぼつて、いるかめがいいました。うさぎさんの白いすがたが、一本まつのほうへいか

8



ないで、みえたり かくれたり しながら、川にそつて  
はしつていきました。うさぎさんは、川をわたるばしょ  
をさがすために、とおまわりをはじめたのです。

「かめさんはどこだらう。」

と、あとからのぼつてきた子がめがいました。  
かめさんのすがたはだれの目にもみえませんでした。  
た。みんなは、あんまりとおくばかりみて、よべば  
こたえそうなちかいくさむらの中を、ごそごそは  
つているかめさんに、気がつかなかつたのです。

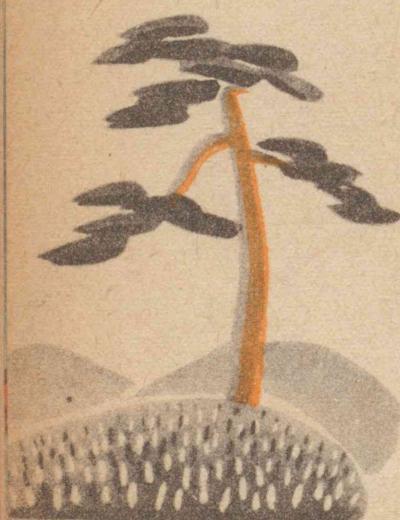
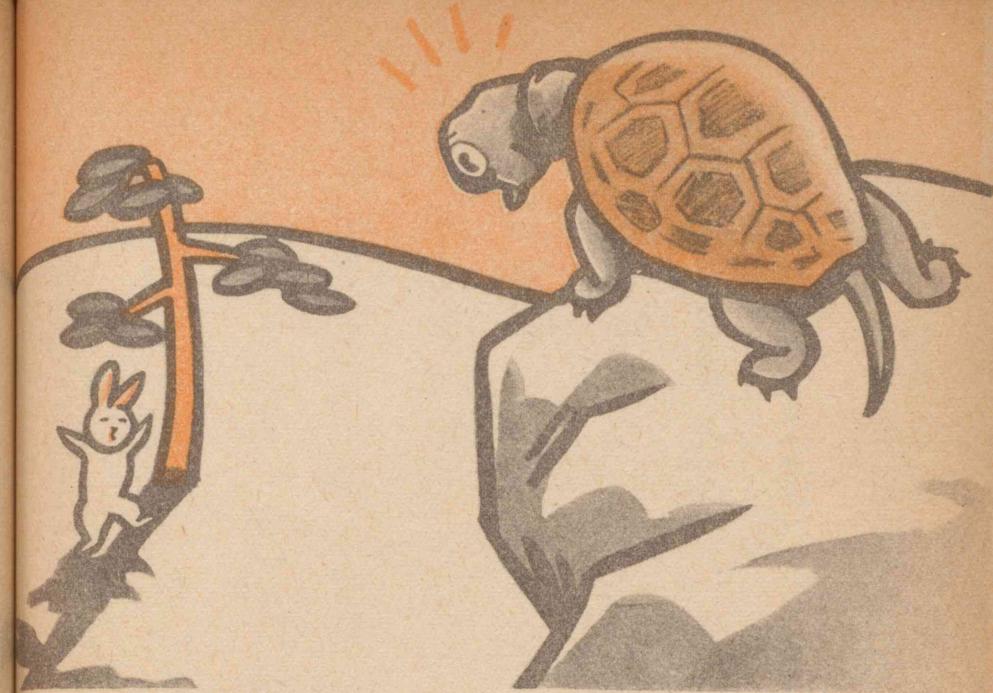
かめさんは、みんなに自分の早いようすを  
みてもらいたいので、あせをかきながらい  
そぎました。あいてのうさぎさんがみえないだけに、  
自分がとくべつのろいとは思ひませんでした。そし  
て、先にとびだしたうさぎさんも、自分よりうしろ  
のほうにいるような気さえするのでしたところ  
が、かめさんをびっくりさせることがおこりました。  
自分のすすんでいる道をしらべるために、かめさ  
んは、とちゅうのいわの上から一本まつのほうを  
みたのです。するとどうでしょう、ひるねしていろか、

とおまわりをしてまいつて  
いるはずのうさぎが、まつの  
木の下で手をふつていい  
のです。そんなはずはない  
いと、なんべんもみなおしま  
したが、やつぱりあいての  
うさぎさんにちがいあります  
ん。

うしろをみるとおかの  
上で、おうえんの友だちや

子がめたちが、手をたたいています。風におくられて、  
うさぎをほめる声もわあわあきこえます。  
かめさんは、からだじゅうの力がぬけていくよ  
うな気がしました。

あたまも、手も、足も、こうらの中にはひっこ  
めて、いわの上でうごこうともしないかめさんを、  
お日さまがにこにこわらつて  
みていましたとさ。



六 ほたる

さつきまで、

ほたるを よんで いた 声も、  
もうきこえなくなつた。

かえるの 声は  
にぎやかだが、  
夜は だんだん しずかになつて  
くる。

弟は まくらもとに  
ほたるかごを おいて ねて いる。  
ほたるは、しづかに  
光を とぼして いる。

よく ねむつた  
かわいい  
かお。



かごを、でた、ほたるが、一匹、  
かやの、中を、とんで、いて、  
かごの、ほたると、はなしあつて、いる。



## 七 なまえ

一

私の組に、「さいとうさん」が三人います。

さいとうたつおさん

さいとうさぶろうさん

さいとうちよ子さん

です。

女の子では、「かず子さん」が二人、「きょう子さん」が二人います。

すずきかず子さん

山本かず子さん

林きょう子さん

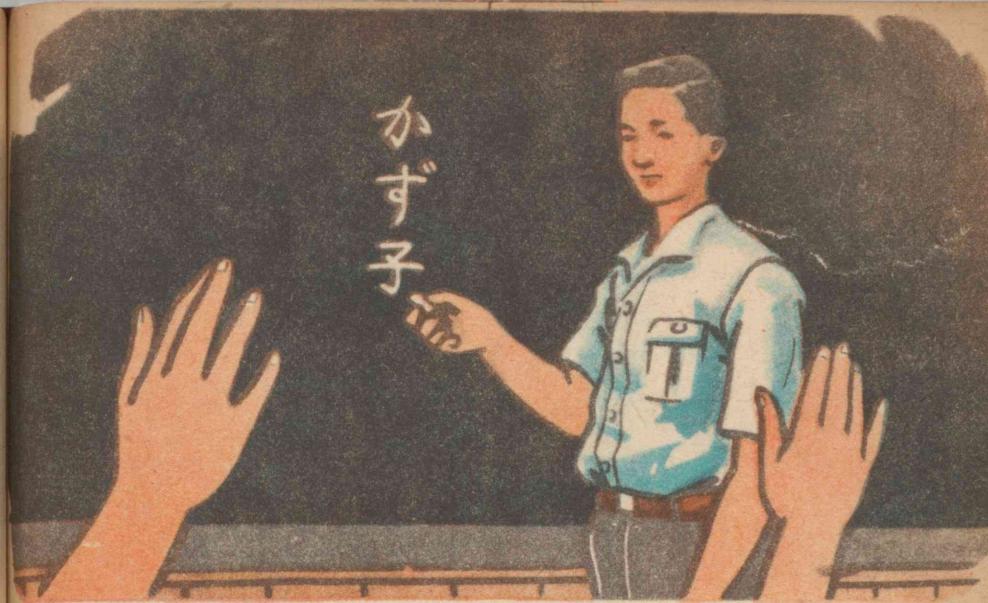
わたなべきょう子さん

です。

男の子は、「ろう」か、「お」でおわるのがおおいし、女は、たいてい「子」とついています。「え」とついている人もいます。

二

このあいだ、学校で、おとうさんやおかあさんのなまえをしらべた時、「まつ」とか、「たけ」とかいうのがありました。「とら」というのもありました。先生のお話では「まつ」や「たけ」はだいじなもので、えんぎがいいとか、よくそだつとかいうので、なまえにとつたのだそうです。でも、「とら」はおかしいと思つて、みんなでおききました。「とら」はつよいし、むかしは、ことしは「とらのとし」とか、「うさぎのとし」とかいって、くべつしたので、その「とらのとし」に生れ



た人に「とら」というなまえをつけることもあつたのだそうです。

三

私は、「れい子」というなまえがすきですから、「おかあさん、どうして『れい子』とつけてくれなかつたの。」

といいました。おかあさんは、

「そうですね。それもいいなまえですけれど、あなた

のなまえもいいなまえですよ。あなたのなまえを

つけるまでには、おとうさんも、おかあさんも、ずい

ぶんかんがえたのですよ。」

といいました。

氏名	一日
あおきかずあ	○
あらいしげる	○○
いのうえとし子	○○
うえだひろし	○○
あおいしかず子	○○○
かねこしろう	○○○
きむらとある	○○○
わかばやしいさむ	○○○
さとうたか子	○○○○
みやたかし	○○○○
よしかわのぼる	○○○○
かわだまよえ	○×○○○
しまのひで子	○×○○○
やまとさいいち	○○○○○
くぼたまつ	○

八 かぼちゃ

ぼくの うえた かぼちゃに  
ついて、気の ついた ことを  
三つばかり 書きます。

ひとつは、ぐんぐん のびる  
すばらしい 力が、かぼちゃに  
あることです。えだから えだ  
が でて、どこまでも のびて  
いきます。

どの つるの さきも、にぎり  
こぶしを ふりあげて はしる  
ような かつこうを して い  
ます。にぎりこぶしの 中には、  
かわいい はやめが はいつて  
いるのです。

ふりあげた この にぎりこ  
ぶしは、ひるまは じつとして  
いるようです。けれども、よる  
の うちに 五センチも、六セ





けれども、花は、かならず  
このはよりも高くでて  
目がさめるような色で、  
ぱつとさくのです。さくの  
は朝です。天気のよい  
朝ほど元気よくきれいに  
さきます。

ぼくは、まい朝、おばなを  
とつてめばなにかふんを



ンチものびるのです。これ  
はぼくがしるしをつけ  
て、かんさつしてみたので  
すが、はじめてしつた  
時にはおどろきました。  
もう一つは花のこと  
です。

かぼちゃのはは、大きく  
て、おなじ高さでいちめ  
んにひろがっています。

つけて やります。めばなの くびが、おじぎを するよ  
うに まがれば、たいてい かぼちゃが なるようです。  
どの 花も、ゆうがたには しおれて しまいます。つ  
ぎの 朝 さく 花は、先が とがって、てぬぐいでも  
しぶつた 時のように なつて います。

おしまいの ひとつは、まきひげのことです。

これは じょうぶに できて いて、なかなか きれませ  
ん。くきが 地めんを はつて いる 時は、まるい わの  
ようになつて、くきを 地めんの 上に ささえて い  
るよう みえます。まきひげは なにかに さわれば  
ぜんまいの ように くるくる まきついて しまいます。  
そして ばねの ように、のびたり ちぢんだり するので、  
風に ふきつけられても、きれる ことが ありません。

これで 三つになりましたが、まだ ほかにも いろ  
いろ しらべる ことがあります。  
ぼくは、かぼちゃ日記を つける ことに して いま  
す。

九 夏やすみ

一 きりぎりす

ぎーつちよん

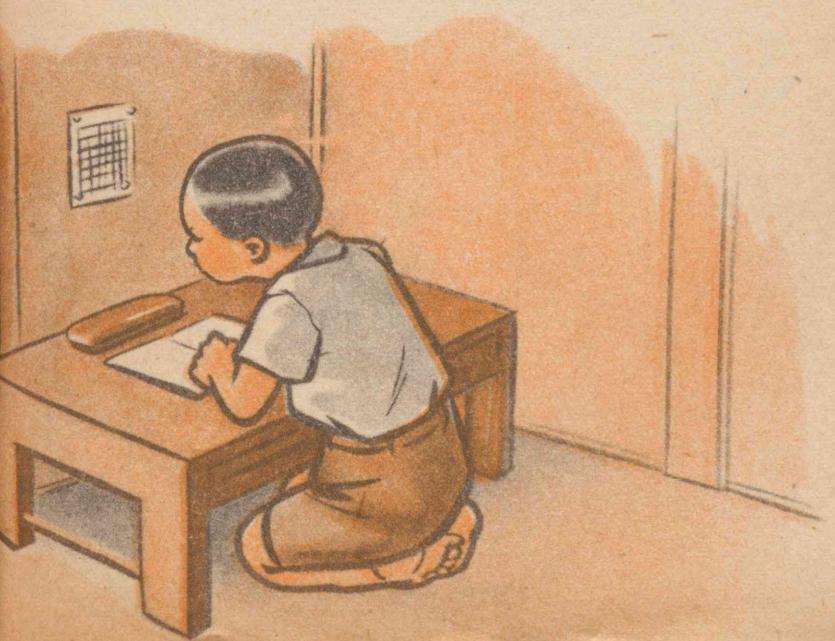
ぎーつちよん

「あつ、きりぎりすが なないた。」

さつきから、べんきょうして  
いた。ぼくは、かけて いつて  
えんがわに つるして ある 虫  
かごを みました。

きりぎりすは、もう すっかり  
かごになれて います。ぼくが  
そばに よると、ちょっとな  
きやめましたが、すぐ または  
ねを ふるわして、なきだしまし  
た。

きのう、いれて やつた きゅ  
うりを、すこし かじって いま  
す。ぼくは、だいどころから あ  
たらしいのを もつて きて、と



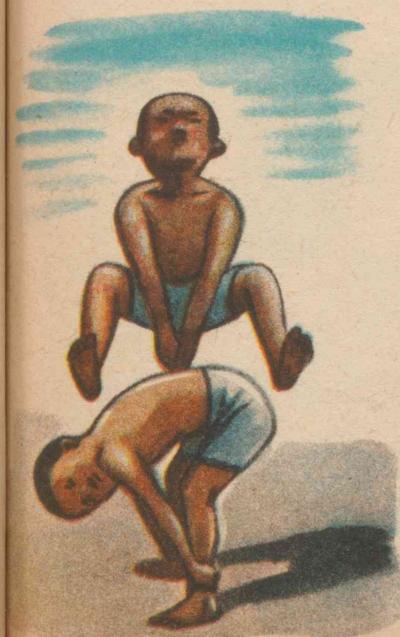
りかえて やりました。

ぎーっちゃん。

ぼくが べんきょうして いる あいだに きりぎりす  
は 高い 声で なんども なきました。  
きょうも、はや あつい 日が かつて てりつけて  
います。

## 二 水およぎ

「みのる、いくよ。」



「ちよつと まつて。」

ぼくは、大いそぎで、用意をして とびだしました。  
麦わらぼうしの かげが ならんで はしります。

あせが、ふきだして きます。  
川は、子どもたちで いっぱいです。みんな たのしそ  
うに さわいで います。

かわらの いしころは とても あつく やけて います。

あついのを がまんして、たいそうを しました。あた  
まと むねを ぬらして、川の中へ はいりました。

にいさんは、じょうずなクロ  
ールで、ふかいところを およ  
ぎきつて、むこうぎしの 岩に  
あがりました。そばで みていた  
まさおくんが、

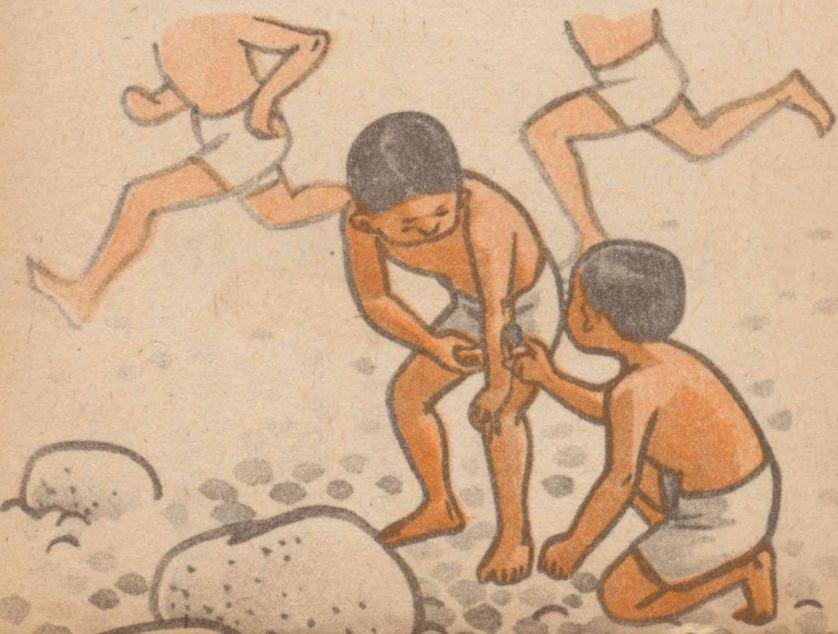
「うまいねえ。早く あんなに  
およげるようになりたいなあ。」  
といいました。

ぼくは、あつまって きた 友だ  
ちと、川の中でおにごっこを

したり、水のひっかけっこを  
したり、いしころさがしを した  
りして あそびました。また 水  
にもぐって いきのながさく  
らべなども しました。

ぼくは、もう すっかり 水に  
なれて、すこし よげるようにな  
りました。

水から あがつて、かわらで  
あそびました。



ぬれたからだを、すなだらけにして、ふざけあつたり、すもうをとつたりしました。

いま、いちばんくろいのは山田くんですが、ぼくももつとくろくなつて、九月、学校がはじまつた時には、みんなをびっくりさせてやろうと思つています。

弟がたらいの中で、おもちゃのきんぎょとあそんでいます。

### 三 ぎょうずい

きんぎょをゆの中にしづめて、およがそようとするのです。が、なんべんしずめても、きんぎょはぶかりぶかりとうきあがります。ひとりでくやしがつてばちやばちやとゆをはねとばしています。とうとうきんぎょもにわにとびだしてしまいました。



私とねえさんで、弟をあらつてやりました。せつ  
けんのあぶくだらけになつたからだに、さあつと  
あたらしいゆをかけてやると、弟は気持よさそう  
に目をとじています。

ねえさんがタオルにくろんでえんがわまでだつ  
こしてきたのをていねいにふいてやりました。  
それからからだに白いこなをつけた。やりまし  
た。弟はきやつときやつとさわいでなかなかつけさ  
せません。おしまいにははだかでざしきをかけまわ  
つてみんなをわらわせました。

弟のつぎに私がぎょ  
うずいしました。ひるまの  
あせをながすと、さっぱり  
としていい気持でした。  
ごはんがすむと、みんな  
にわへ出てタスズミを  
しました。

星がとてもきれいでし  
た。



十 五十音

アメンボ アカイナ ア・イ・ウ・エ・オ  
ウキモニ コエビモ オヨイデル。

カキノキ クリノキ カ・キ・ク・ケ・コ  
キツツキ コツコツ カレケヤキ。

ササゲニ スヲカケ サ・シ・ス・セ・ソ  
ソノウオ アサセデ サシマシタ。

タチマショ ラツパデ タ・チ・ツ・テ・ト  
トテトテ タツタト トビタツタ。

ナメクジ ノロノロ ナ・ニ・ヌ・ネ・ノ  
ナンドニ ヌメツテ ナニネバル。

ハトポッポ ホロホロ ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ



ヒナタノ オヘヤニヤ フエヲフク。

マイマイ ネジマキ マ・ミ・ム・メ・モ

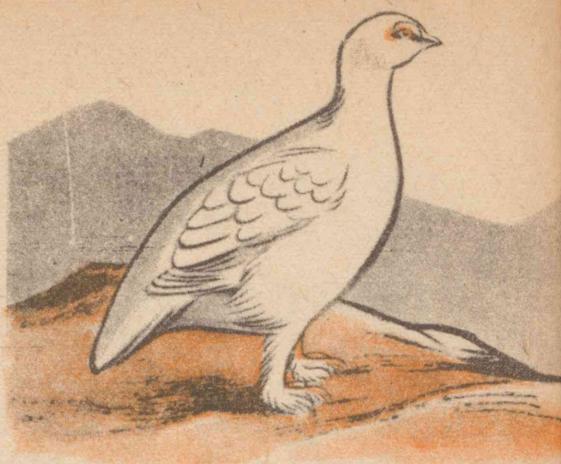
ウメノミ オチテモ ミモシマイ。

ヤキグリ ユデグリ

ヤ・イ・ユ・エ・ヨ

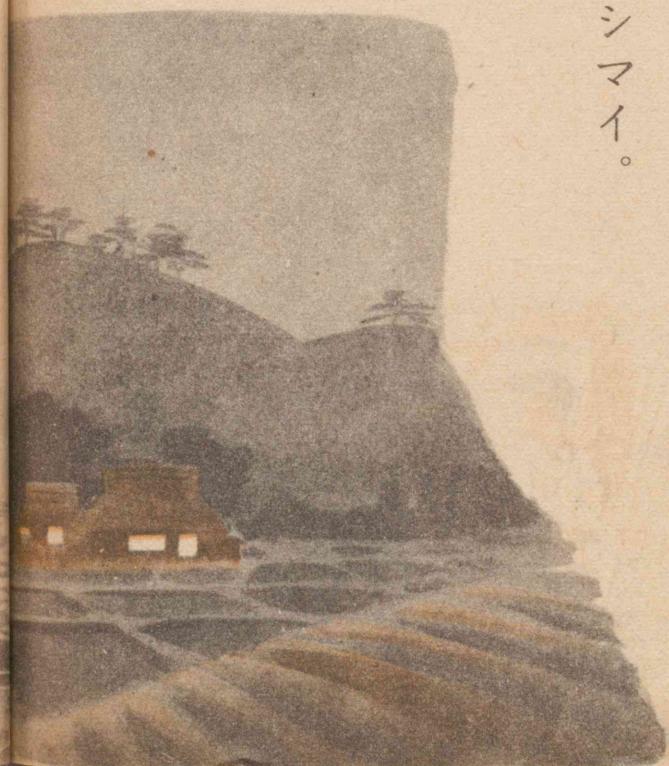
ヤマダニ ヒノツク

ヨイノ イエ。



ライチヨハ サムカロ  
ラ・リ・ル・レ・ロ  
レンゲガ サイタラ  
ルリノトリ。

ワイワイ ワツショイ ワ・ヰ・ウ・エ・ヲ  
ウエキヤ イドガエ オマツリダ。



Copyright 1948, by  
The Kyōiku Toshō Kenkyukai

小国204

All rights reserved

The text of this publication or any part thereof  
may not be reproduced in any manner whatsoever  
without permission in writing from the authors.

二年生のこくご 上

Approved by Ministry of Education  
(Date Oct. 14, 1949)

五月の川の中……小川未明氏  
かめとうさぎ……栗原一登氏  
なまえ……奥水 実氏  
五十音……北原白秋氏

五月の川の中……小川未明氏  
かめとうさぎ……栗原一登氏  
なまえ……奥水 実氏  
五十音……北原白秋氏

感謝

左の作品を本書に掲載させ

ていただきましたことについて、

著作者諸先生に心から感謝をいたします。

編 者

表紙とさしえ

昭和二十三年八月十八日再版発行  
昭和二十四年十月十八日再版発行  
昭和二十二年八月十四日再版発行  
昭和二十三年八月十八日再版発行  
東京都文京区大塚窪町  
東京高等師範学校附属小学校内  
担当執筆者 東京高等師範学校教授  
理事長 東京高等師範学校教諭  
田原輝夫 大小森青花田佐  
法財團 教育図書研究会  
会長務台理作  
槐島下木田中藤  
代表者 川口芳太郎 豊保  
定忠 幹哲太太  
雄治巖勇幸郎郎会  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
東京都港区芝三田豊岡町八番地

九 (82)	心 (52)	力 (39)	麦 (33)	声 (23)	思 (17)	多 (13)	子 (4)
虫 (82)	耳 (53)	米 (39)	林 (34)	時 (24)	話 (17)	十 (13)	学 (4)
岩 (86)	地 (57)	夏 (39)	路 (35)	足 (24)	出 (18)	音 (14)	校 (4)
持 (90)	草 (58)	分 (42)	村 (35)	世 (26)	火 (21)	秋 (14)	男 (5)
星 (91)	道 (60)	東 (45)	高 (35)	界 (26)	花 (22)	八 (14)	女 (5)
	白 (63)	西 (45)	家 (35)	雨 (28)	水 (22)	組 (14)	本 (7)
	七 (71)	海 (45)	不 (38)	用 (31)	早 (22)	弟 (14)	風 (8)
	色 (79)	夕 (46)	自 (38)	意 (31)	黒 (22)	私 (16)	田 (12)
	朝 (79)	夜 (49)	由 (38)	紙 (31)	赤 (22)	元 (16)	島 (12)
	記 (81)	光 (49)	百 (38)	手 (31)	天 (23)	氣 (16)	書 (12)

發行所

印刷者 發行者 著作者  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
代表者 川口芳太郎  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
代表者 川口芳太郎  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
代表者 川口芳太郎  
東京都港区芝三田豊岡町八番地  
代表者 川口芳太郎

学校図書株式会社  
東京都港区芝三田豊岡町八番地

文庫

48  
589

広島大学図書

0130449589

